

2030 年の子どもの安全を考える - 第 1 回 -

現代日本の犯罪を俯瞰する

- 事件から浮かび上がる四つの現象的变化と変わらぬ犯罪者行動 -

はじめに

これは、(公財)全国防犯協会連合会発行「月刊 安心な街に」5月号に掲載された標記標題の論文の概要を紹介するものである。筆者は㈱ステップ総合研究所 清永奈穂(きよなが・なほ)氏である。清永氏は、立教大学教育学修士課程修了後、英国に留学、帰国後に㈱ステップ総合研究所を設立した。NPO 法人体験型安全教育支援機構代表理事。

■ 強まる潜在的犯罪圧力と弱まる自主防犯力

我が国の犯罪認知件数は減り続けている。しかし、アポ電強盗に見る特殊詐欺事件の狂暴化、子供や高齢者・女性等の犯罪弱者への犯罪件数の下げ止まりなど、犯罪は不気味な動きを見せている。したがって、「本当に安心して暮らせているか？」と住民に問うと、「不安である」という回答が多くを占める。しかしそれに対して「何か自分でも安心な街づくりに関与していこう」という守る側のエネルギーは満々とあるかというとはそうではなく、むしろ「誰かがやってくれるだろう」と考える者が増え、守っていこうというエネルギーは若者を中心として落ちてきている。

それだけでなく、独り暮らしの人や高齢者が増え、生活保護受給者率の増加にも見るように、経済格差や経済不安が生活に影を落としている。同時に歪な性的欲求などに応える映像などの入手は、インターネットの発展などにより今やどこにいても容易に入手可能である。つまり犯罪発生 of 潜在的エネルギーはますます満ちてきている。

■ 予想する今後の犯罪動向

このまま皆さんが息長く地域の見守り活動をして下されば、図 1 のパターン 1 のように今の減少傾向が持続するかもしれない。しかしそうではなく「街の安全は誰かがやってくれる」層が増えていけば、パターン 2 のような嫌な事件が不連続ではあるけれども突発的に起き続ける不安定な時代に突入、そして最悪はパターン 3 のようにこれから増加していくという予想である。楽観的かつ他力本願的な「皆さんが息長く末永く地域の見守り活動を継続していく」上に立つパターン 1 は、現実的に可能であろうか。皆さんの慈善の心によりかかった今の日本の安全体制、特に子供の安全体制に息切れを感じないだろうか。

事件らしい事件がほとんど起きていない地域も多いが、同時に各地でパターン 2 の傾向が露わになってきている。

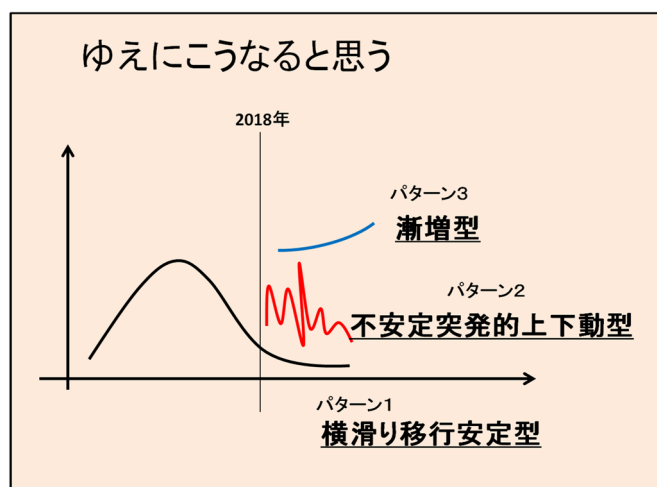


図 1 犯罪動向予想図

昨年 5 月藤枝市の女性看護師殺害事件、6 月新幹線内刺殺事件、福岡市で起きた IT 会場での男性刺殺事件、富山市で起きた交番襲撃事件など、突発的な事件が時を置かず起きている。

■ 平成末型犯罪発生の特徴

これらの現代的ともいえる犯罪の様相を分類すると表 1 のようにまとめることができる。

「ステルス型」とは、下見の段階で見えていた犯罪者の姿を見せずに(つまり下見を殆どせずに)、また追跡も不可能な形で犯行を行うような事件、例えば、いきなり電話の耳元で資金のありかを執拗に聞き出し、金を要求するオレオレ詐欺、また、朝霞で中学生を誘拐し監禁した事件などもこれに当たる。

「確信型」とは、どうしても抑えきれない「やりたい」という自己欲求を抑えきれず、どんな監視があろうと、捕まることを恐れずやってしまう犯罪で、新幹線刺殺事件、交番襲撃事件などが含まれる。

これらの事件を見ていくと、これまでの防犯手法(パトロールや防犯カメラ)の適用による歯止めが効かない、結果(事件)は見えるが、犯行が見えなくなっている、犯罪から地域性(身近な事件感)が失われていることが言えると思う。

表1 四つの犯罪の現代的様相

スタイル	特 徴	例
境界線不鮮明型犯罪	合法視もできないし、非合法視して扱うことも困難	・合法ドラッグ ・JKビジネス
ステルス型犯罪	下見の過程が消失し、突然加害者が眼前に現れる	・オレオレ詐欺 ・ストーカー犯罪 ・現金強奪事件
聖域破壊型犯罪	犯罪と無縁だと考えていた被害 - 加害者、人間関係、空間で突如その聖域性を破る蛮行	・神社親族殺人事件 ・警察上司殺人事件 ・交番襲撃事件
(やるときはやる) 確信型犯罪	防犯カメラ等犯罪行為抑止機能が存在しようが関係なく覚悟を決めて行う	・路上強盗事件 ・ちかん等性犯罪事件 ・サイコの犯罪 ・新幹線刺殺事件 ・交番襲撃事件

■ 新元号時代が迎える、予想される新犯罪世界に向けて

我々は現在、誰もが犯罪の被害に遭わないための新たな手法を皆で知恵を絞り考え、勇気をもって実行していく時代の曲がり角(荒波の中)にいる。

しかし一方で、従来からの変わらぬ犯罪者の行動もこれらの新しい犯罪から見える。どんなに犯罪が変わっても、犯罪者というものは「獲物がいる」そして「やりやすい」と思えば、どこでも犯行を行うという従来の変わらない基本的犯罪者行動がある(図 2)。

犯罪者は「やりやすい = 近づきやすく、逃げやすく、直感的に良い」と思ったら、隙があればその隙をぬってやり遂げるものである。翻ると、どんなに防ぐことが困難かと思える犯罪でも、この犯罪者

が好む「隙」を埋める努力をし、「やりにくく」すれば犯罪を起こしにくくすることも可能だと言える。

現代日本で起きている犯罪の中でも最も許しがたい犯罪である、子供への犯罪をこれから抑えていくにはどうしたらよいか。答えはシンプルである。子供を狙う犯罪者にとって犯罪を「やりにくい」地域社会にすること、つまり、「隙間をつぶす」ための少しの努力を積み重ねていくことである。

それには、従来からの犯罪者の行動である「やりやすい」の構図をとらえること。そして隙間をつぶす新しい見守りの手法を考え、すぐにでも一つひとつできることから実行していくことである。

これから10年後に生きる子供達が安全に暮らせるような未来にするために、手をこまねいている暇はない。見守りに参加する人もいない、活動を続けるのも難しい、子供の安全に関してとても不安という地域は日本中で沢山あるが、しかしこういふときこそ、逆境を逆手にとって皆さんで知恵を絞り、子供の安全のためにスクラムを組み、安全な地域を創っていけると思う。

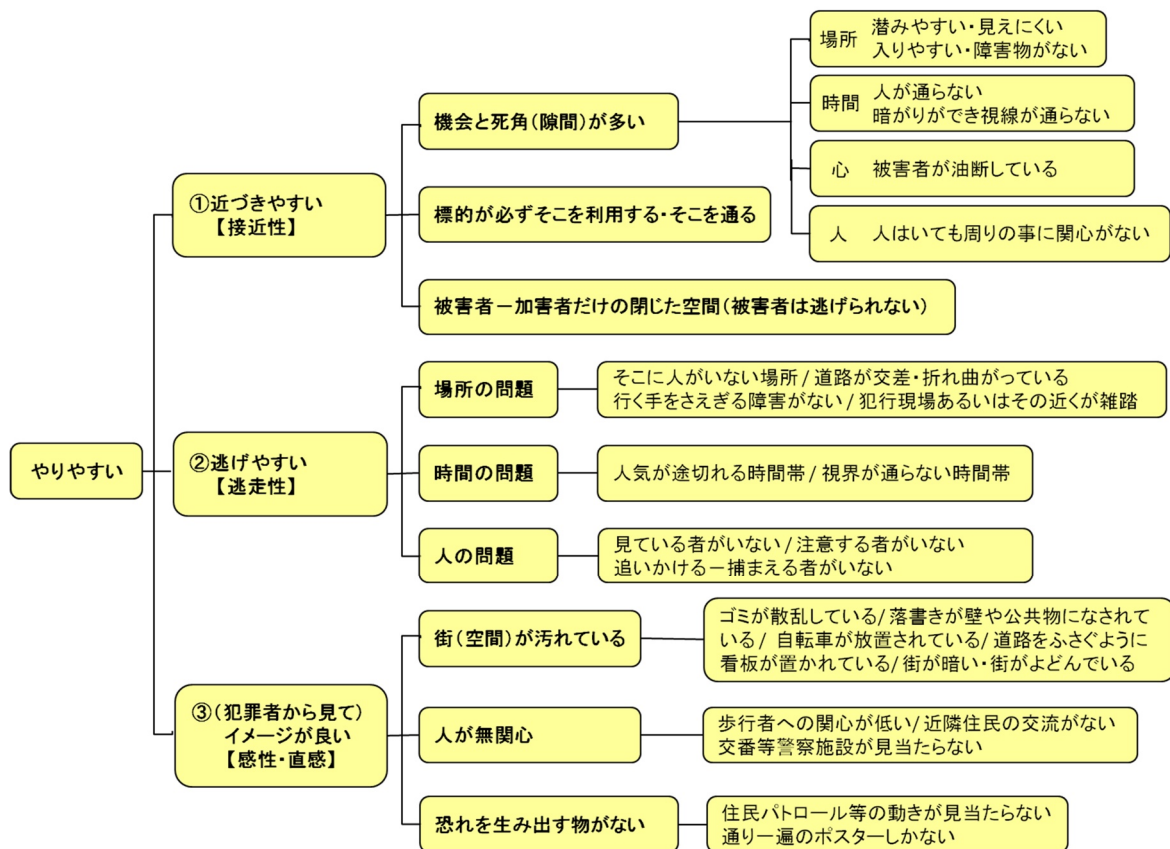


図2 「やりやすい」とはどういうことか？

以上